

## ウサギの肥満対策

ウサギが肥満に  
なるとどうなる？

人でも動物でも、「太っていますね」と言われて「病気だ」と思う人は少ないでしょう。ところが肥満は病気の予備軍なのです。最近では、犬や猫はもちろんのこと、ウサギの肥満症も増えています。

肥満は、食べ過ぎ（カロリーの取り過ぎ）か、高齢や甲状腺機能低下症などで消費するカロリー量が減少したことによって起こります。

最近ではペットとして室内で飼うことが多くなったため、運動不足になりがちです。また、部屋の中はエアコンなどで温度も湿度も一定しているので、体の熱をつくるためのエネルギー消費も少なくなりました。そのうえ人と一緒にいる機会が多くなり、過保護で年がら年中食べ物をもらえるため、カロリーオーバーになってしまうのです。

飼い主さんが太っている場合、ウサギも肥満の傾向があります。食べることが好きな人は、ウサギがおいしそうに食べているのを見ることに喜びを感じるからです。ウサギが喜びそうな食べ物を次々とあげてしまいがちになります。ウサギの肥満の要因のひとつは、飼い主にありそうです。

原因がなんであれ、肥満になればウサギが生活しにくくなるだけでなく、寿命を短くしてしまうことにもなりかねません。

肥満症の判断は、ウサギの腹部に脂肪がつきやすいので、おなかの張り出し具合で見るとよいでしょう。さらに肥満がひどくなると 骨や背骨がさわりにくくなり、メスは首の下の肉垂なども大きくなります。自分のウサギはふっくらポッチャリかわいいと安心していいので、ちょっとさわってみてください。

肥満による  
病気・トラブル

足底潰瘍

太るとあまり活動しなくなりますが、それとともに体が重いために足のうらの皮膚が圧迫されて血液の循環が悪くなり、床ずれのようになってきます。皮膚炎が起き、足のうらの毛が抜けたり皮膚が赤くただれたり、殺菌が増えて化膿してしまうこともあります。痛いので足を上げてかばうように歩くこともあります。

## 皮膚炎

皮膚の血行が悪くなったり、皮膚に深いひだができるため汚れがたまったりします。体を曲げにくくなるため身づくろいがたいへんになり、湿疹などの皮膚炎が起きやすくなることもあります。

### 呼吸の抑制

脂肪は皮下や腹部だけでなくあらゆるところについてきますので、鼻や喉の空気の通りが悪くなります。同時におなかについた脂肪は横隔膜の動きを悪くさせ、呼吸を妨げてしまうこととなります。少し運動しただけでも呼吸が荒くなります。

### 熱射病

脂肪が厚くなると皮膚からの熱の放散が少なくなり、また呼吸による体熱の排出を妨げるため、太っているウサギは熱射病にかかりやすくなります。気温が高いときや直射日光には注意が必要です。

### 盲腸便の採食困難

体を曲げにくくなるため、早朝、肛門から直接口をつけて栄養のある盲腸便を食べることができなくなります。そうするとお尻が汚れやすくなったり、栄養の欠乏が起きるかもしれません。

### 体重の増加

太ると体が重くなるので運動がしにくくなりますし、骨や関節に負担がかかるため、関節炎や背骨を痛めたりしやすくなります。

### 麻酔時の危険性

病気の治療などで麻酔をかけるとき、脂肪の中に麻酔薬が分散して薬が効きにくくなり、また覚めるのも遅くなります。太っていることで呼吸がしづらくなるし、心臓にも負担がかかるので、ふつうのウサギにくらべて麻酔から覚める時間が長くなりがちです。

そのほかに食欲不振・脂肪肝・不妊症・糖尿病・免疫力の低下なども起こりやすくなるでしょう。

このように、脂肪はたくさんの病気の引き金になり、生活もしにくくなりますので太らせないようにしたいものです。

## トラブル解決（治療）

やせる方法は、人もどの動物も同じです。運動してカロリーを消費するとともに、カロリーを取り過ぎないようにするのです。

ウサギにとっても三大栄養素の脂肪・タンパク質・炭水化物はカロリー源になりますが、特に高カロリーの脂肪の多い食餌はさけます。繊維が多く低カロリーのチモシーの干草を中心にするるとよいでしょう。

ウサギは人とちがって自分からやせる努力はしないので、ダイエット用のメニューにしても食べてくれないことがあります。ウサギのダイエットがうまくいかないのは、飼いさんのやさし過ぎるところからくる弱さで、根性を出さないとウサギのいいなりになってしまい、いつまでたっても肥満は解決できません。

できることなら毎日体重を測り1週間ごとに少しずつ体重が減って3ヵ月後くらいに理想体重になるという形がよいでしょう。

運動量を増やすには、ケージを広くしたり、リビングや野原など外で運動させる機会を増やすことをおすすめします。毎日コンスタントに運動させると効果的です。

しかし、運動でやせるには限界があるので、大切なことはやはり食餌の管理です。おやつやペレットを減らし、繊維の多い野菜や干草を中心にします。ただし、急に食餌の内容を変えると腸内細菌のバランスが崩れて、下痢を起こしやすくなりますので、少しずつ切り換えていくことが大切です。

また、極端に食餌を減らしたり、絶食させたりしますと、胃腸障害や肝細胞の中に脂肪が沈着する肝リピドーシスという病気になりやすいので、むりなダイエットには気をつけましょう。

## 肥満の予防

人もそうですが、一度太るとやせるのはたいへんな努力がいりますので、肥満にならないように子どものときから気をつけることがポイントです。

成長期は栄養やエネルギーをたくさん必要とするのでよく食べることは大事ですが、成長が止まるにつれて、摂取するカロリーを控えめにしていきます。高繊維でカルシウムの多過ぎない干草（チモシー）をいつでも自由に食べられるようにし、1日2回量を決めてペレットと新鮮な野菜を与えます。果物はカロリーが高いので少しにするるとよいでしょう。

干草などの繊維は、消化器の運動を活発にし、ほとんど消化吸収されないの、カロリーの取り過ぎを防ぎ、飲み込んだ毛の排泄をうながします。また、歯を頻繁に使うため、歯同士が磨り減って伸び過ぎを防ぐので、一石二鳥（肥満・胃停滞・不正咬合の予防）となります。

最近では、肥満防止につながる低カロリー・高繊維のペレットを数社から出しました。担当医と相談しながら、個々のウサギに合った減量作戦をたて、こまめに連絡しつつダイエット、がんばりましょう。

## コラム 動物レンタル

家に帰ると、なんと 1.5 メートル、マフラーかフンドシのようなファックスが届いていました。「いつもお世話になっております。長くて済みません、5 枚分です」学校飼育動物を考える会の N 先生からでした。

「学校飼育動物のレンタルについてこれも 1 つの飼育の形と認めてほしい」という動物貸し出し業者の方からの投稿をめぐって、でした。

時代とともに、さまざまな業種が生まれたり消えたりしています。レンタルスキー・レンタルビデオ・レンタル海外カバン・レンタル CD、このへんまではわが家も便利に利用させてもらっています。

ところが、便利になるのはよいけれど、やはりその影には、いろいろ問題が密んでいるようです。

学校飼育動物は、約 10 年前から「動物を飼うこと触れ合うことは、子どもたちの心の発達にいい影響を与える」ということで、文部省（現文部科学省）の教育プログラムにも組み込まれました。

動物を飼うことは、2 つの大きな意味があります。1 つは命あるものと触れ合うこと。もう 1 つは、この大切な命を守るために、責任を持ったり心配したりすること。

レンタル業者の方の正しい飼育管理のもとに、1 つ目の目的は容易に得られると思います。でも 2 つ目はどうでしょう？ 動物を飼うことの大変さを味わうことです。先生も生徒も正しく動物を飼うために勉強しなくてはいけないし、みんなでひとつの心で健康管理や病気の看護をする必要が出てきます。動物の死に直面した時に、辛さや哀しみも味わなくてはなりません。夏休みなども、みんなで考え、分担して動物の世話をしなければなりません。面倒臭いこと、いやなことを経験すること、これも人間形成のために大切な部分のはずです。

むずかしい状態だった動物が、みんなの看護でよくなったり一生懸命面倒みただけで亡くなってしまったり、そんな中で絆ができたり、思いやりが深くなったりするのではないのでしょうか。

私たちの仕事もそうだけど、大変な分、生きがいにつながったり、よろこびが大きくなったりするものです。

病気になったから返却、夏休みだから返す、みんな楽に動物飼えるけれど、おいしいことだけつまみ食いしていても、本当の味はわからないかもしれません。命はまるごと受けとめてほしいなって思います。